

## イザヤ書47-48章「バビロンから離れる喜び」

### 1A 女王の座から降りるバビロン 47

1B 神の復讐 1-7

2B 「私だけで、ほかにいない」 8-11

3B 役に立たない呪術 12-15

### 2A 「わたしに聞け」 48

1B 頑なな心 1-11

1C 心にある偶像 1-5

2C 新しい事 6-11

2B バビロンからの解放 12-22

1C 変わらぬ主 12-16

2C 平和の川 17-22

## 本文

イザヤ書 47 章を開いてください。私たちはイザヤ書の後半部分、40 章以降の箇所での一つの区別の最後になりました。イザヤ書後半は、40 章から 48 章までが一区分。49 章から 57 章が二つ目の区分、そして 58 章から 66 章が最後の三つ目の区分になります。

私たちは 40 章において、主が呼びかけておられる声を聞きました。「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」という預言者への神の呼びかけから始まり、それから「見よ。あなたがたの神を。」というユダの住民に対する呼びかけで始まっています。主が七十年のバビロン捕囚を終わらせて、彼らをクロスというペルシヤの王を通して解放させることを約束されました。ところが、当のイスラエル人たちが、この良き知らせに対してそのまま喜んで応答していません。それは、バビロンにおいて虐げを受けながら、その世的な生活が自分の一部になってしまっていたからです。主は、バビロンからの解放を、第二の出エジプトに位置付けています。かつてエジプトでもイスラエル人が、虐げられながらもその生活習慣から離れられなかったように、バビロンの生活が沁みついていたのです。そこで、主は最後にイスラエルに対する呼びかけを行われます。

### 1A 女王の座から降りるバビロン 47

47 章は、46 章からの続きです。主がバビロンを滅ぼされることを宣言されています。46 章では、バビロンが自分たちの神々である偶像を、ペルシヤによってその町が滅ぼされてから運び出す姿から始まりました。しかしイスラエルは、自分で運ばなければいけない神ではなく、自分を運んでくださる神がおられます。そして主が続けて、バビロンに対する宣告を行われます。

## 1B 神の復讐 1-7

47:1 「おとめバビロンの娘よ。下って、ちりの上にすわれ。カルデヤ人の娘よ。王座のない地にすわれ。もうあなたは、優しい上品な女と呼ばれないからだ。47:2 ひき臼を取って粉をひけ。顔おおいを取り去り、すそをまくって、すねを出し、川を渡れ。47:3 あなたの裸は現われ、あなたの恥もあらわになる。わたしは復讐をする。だれひとり容赦しない。」

バビロンがペルシヤの手に渡るのを、女王の座から降りて、奴隷の女になる屈辱として描いておられます。優しい上品な女は、自分の足が地面で汚れるのを嫌がるほどであります。女奴隷は塵の上に座らなければいけないほどになります。それから、碾き臼を引くという肉体労働も課せられます。そして、顔の覆いを上品な女は着けますがそれも取り去られ、ユーフラテス川などを渡らなければいけない時に、すねを出さないといけません。そして、裸が露わにされて性的な屈辱も味わいます。この描写を、バビロンの町全体に対して主は語っておられます。

バビロンの町は、前回の学びで話しましたように、それはそれは巨大な都でした。高さ 90 メートル、幅 24 メートルの城壁に取り囲まれていました。その周囲は 65 キロにも及びます。その真ん中をユーフラテス川が流れていました。そして、純青銅の 100 もの門があり、250 もの見張り塔がありました。難攻不落の城と言われていました。メディア・ペルシヤ軍がそこを包囲しましたが、バビロンに暮らす全住民の 20 年分の食糧の備蓄があったと言われます。そして中には、世界の七不思議に数えられている空中庭園がありました。イシュタル門も有名です。そして、中心には「エ・テメン・アン・キ」と呼ばれる天に近づく塔があり、マルドゥクを祭る神殿「エサギラ」もありました。

そのような巨大な都、強い都を主は、娘に喩えておられます。主は、ご自身と人々との関係を男女関係になぞらえることをしばしばなされます。イスラエルに対してもシオンの娘と語られることが多いです。そこには、「頼る」という意味合いがあります。女が頼ることのできる男性を探すように、人々は自分の頼れるものを探します。頼れる存在として、バビロンは自分だけは特別だと思っていました。他のものが倒れても、自分たちだけは倒れないと思っていました。その高慢、傲慢を主は砕かれます。

主は、「わたしは復讐をする。だれひとり容赦しない。」と言われます。復讐する神を信じることはとても大切です。この不条理に満ちた世の中があります。そして、自分自身さえ善を願っているのに、悪を行なっている矛盾を見ます。こうした歪みがあれば、だれもが厭世的になります。今の時が楽しければよいのだと思います。しかし、イエス様がこの世の中でその不条理を十字架上で受けてくださり、そしてこの方であって神はこの世を裁かれます。ここに希望があります。だから、しっかりと神の復讐を信じないといけません。

47:4 私たちを贖う方、その名は万軍の主、イスラエルの聖なる方。47:5 「カルデヤ人の娘よ。黙ってすわり、やみにはいれ。あなたはもう、王国の女王と呼ばれることはないからだ。47:6 わたし

は、わたしの民を怒って、わたしのゆずりの民を汚し、彼らをあなたの手に渡したが、あなたは彼らをあわれまず、老人にも、ひどく重いくびきを負わせた。47:7 あなたは『いつまでも、私は女王でいよう。』と想着て、これらのことを心に留めず、自分の終わりのことを思ってもみなかった。

主は、バビロンが地に座るだけでなく、闇に入ると宣言されました。これは、既に 14 章でバビロンの王が陰府に下るところで預言されています。人は死ぬだけでなく、死んでから裁きを受けます。そして、バビロンが裁かれる理由が書かれています。イスラエルの民を、奴隷として酷使したことがその原因だったのです。確かに主はユダの民を裁かれるためにバビロンを器として用いられました。バビロンが彼らを捕え移したには、主の許しがあったのでした。しかし彼らは、「彼らを捕え移せたのだから、酷使しても構わないのだろう。」と、その捕囚の行為を正当化したのです。このことをエレミヤが預言しています。「エレミヤ 50:7 彼らを見つける者はみな彼らを食らい、敵は『私たちには罪がない。彼らが、正しい牧場である主、彼らの先祖の望みであった主に、罪を犯したためだ。』と言った。」このことのゆえに、主は彼らに容赦ない裁きを下されます。

ここから二つの霊的教訓を得られます。一つは、「自分が用いられることは、自分を正しくするのではない。」ということです。イスラエルの民もかつて、この過ちを犯しました。カナン人を追い出すのは、カナン人が悪かったためで、イスラエルが正しかったからではありません。「申命 9:4 あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出されたとき、あなたは心の中で、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ。」と言ってはならない。これらの国々が悪いために、主はあなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。」私たちは、自分が用いられることを、自分が正しさの物差しにしてしまうことがあります。全くの神の御業であり、自分ではないのです。

もう一つは、「倒れた人々に憐れみを持つ」ということです。主は一貫して、ご自身が裁かれたイスラエルを物笑いにし、彼らに害を加える異邦の民を厳しく裁かれています。人の落ち度によってその人が倒れる時に、私たちは神の立場に自分を置いて彼らを裁くことは御心に反することです。「ローマ 14:4 あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」主が裁かれる方であり、私たちはこの方を恐れるべきであり、そして倒れた人を御心ならば立たせる役目を負っています(ガラテヤ 6:1-2 参照)。

そして、ここではバビロンが偽りの保障、安心感の中にいることが書かれています。「7 あなたは『いつまでも、私は女王でいよう。』と想着て、これらのことを心に留めず、自分の終わりのことを思ってもみなかった。」とあります。もし私たちが終わりに心を留めなければ、終わりがあり、その時に報いがあるということに心を留めなければ、バビロンと同じように自分を中心に生きて、その中で満足してしまいます。

## 2B 「私だけで、ほかにいない」 8-11

47:8 だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住んでいる女。心の中で、『私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくて済もう。』と言う者よ。47:9 子を失うことと、やもめになること、この二つが一日のうちに、またたくまにあなたに来る。あなたがどんなに多く呪術を行なっても、どんなに強く呪文を唱えても、これらは突然、あなたを見舞う。

バビロンが、子を失い、やもめになると宣言しておられます。寡になるということは、今の時代のように考えてはならず、自分の生活の糧がなくなる、それだけ財政的に、社会的に夫に拠っていました。エリヤが、シドンにいるやもめとその息子の話を思い出してください、自分たちは死ぬための準備をしていましたが、それは珍しいことはでなかったのです。それに加えて子を失うことは、自分の扶養の支えを失うことです。つまり、全て自分に支えになるものが取り除かれるということです。

ここで彼女の言っている、「私だけは特別だ」という言葉は、直訳ですと、「私だけで、ほかにいない」です。分かりますか、主がずっと、「わたしが神である。ほかにいない。(46:9)」と言われていますが、まさに同じ言葉を発しています。他にいろいろな災いが人々に襲いかかっている時、それでも自分は大丈夫だと思っているなら、バビロンと同じ心の状態になっています。その安心は、神のみが持っておられる立場です。ご自分で存在することができる方、自存の方であります。神ではないものは、御心であればなくなってしまうもおかしくない存在なのです。だから、「主のみこそならば、私は生きている」と言いなさいとヤコブは手紙の中で話しました(ヤコブ 4:15)。

そして、これらのことが「突然」起こるということが特徴です。これは史実で確認できます。バビロンの王ベルシャツアルが大宴会を催していた時に、その夜にメディア・ペルシヤ軍が宮殿に侵入し、彼を殺しました。主はご自分が来られることについて、心の用意ができていない人には、突然、盗人のように来ると何度も何度も言われました。

47:10 あなたは自分の悪に拠り頼み、『私を見る者はない。』と言う。あなたの知恵と知識、これがあなたを迷わせた。だから、あなたは心の中で言う。『私だけは特別だ。』47:11 しかしわざわいがあなたを見舞う。それを払いのけるまじないをあなたは知らない。災難があなたを襲うが、あなたはそれを避けることはできない。破滅はあなたの知らないうちに、突然あなたにやって来る。

バビロンは、占星術の中心地でありました。先ほど話したように、天に届くための、まさにバベルの塔と同じような、「エ・テメン・アン・キ」があります。しかし、それらの知識によってバビロンは救われませんでした。どんなに知識や知恵で自分を武装しようとも、主が自分の悪に対して報いを与える方であることをこの御言葉は教えています。

私たちの生活は、いつも神の前で裸にされています。「ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおこせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たち

はこの神に対して弁明をするのです。」ですから、どんなに自分のしていることを正当化しようとも、主の語られたことはその通りになり、自分のしたことについて申し開きをしなければなりません。自分で自分を隠すことができると思っていること、これが問題です。

### 3B 役に立たない呪術 12-15

47:12 さあ、若い時からの使い古しの呪文や、多くの呪術を使って、立ち上がれ。あるいは役立つかもしれない。おびえさせることができるかもしれない。47:13 あなたに助言する者が多すぎて、あなたは疲れている。さあ、天を観測する者、星を見る者、新月ごとにあなたに起こる事を知らせる者を並べたてて、あなたを救わせてみよ。47:14 見よ。彼らは刈り株のようになり、火が彼らを焼き尽くす。彼らは自分のいのちを炎の手から救い出すこともできない。これは身を暖める炭火でもなく、その前にすわれる火でもない。47:15 あなたが若い時から仕え、行き来してきた者たちは、このようになる。彼らはおのおの自分かってに迷い出て、あなたを救う者はひとりもない。」

占星術をしていた者たちに対する裁きの宣告です。バビロンは、昔からこれらの知識によって生きていました。したがって、これ以外の生き方について方法を知りませんでした。しかし、証しが多かった訳ではありません。ダニエルとその友人三人をバビロンに置いてくださり、バビロンに対して終わりの日に起こることを、他の呪法師らができなかったことをネブカデネザル王に伝えました。地上にある知恵によっては、決して知らせることも、解き明かすこともできなかったことを、ダニエルは伝えたのです。したがって、この方に聞くべきでした。

私たちの周りにも、知恵や知識と呼ばれるものが沢山あります。しかし、それらに自分の終わりや救いを求めることはできません。終わりの日が近づくにつれて、主なる神の証しでなければ生きられないことが明らかになります。また、個人的な終わり、つまり死が近づく時にも、その他の知恵や知識と呼ばれているものに救いはありません。むしろ、ここに書かれているように、自分を疲れさせるだけなのです。伝道者の書にそのことが書かれています。彼が最後に述懐しました。「伝道者 12:12-13 わが子よ。これ以外のことにも注意せよ。多くの本を作ることには、限りがない。多くのものに熱中すると、からだが疲れる。結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」主を恐れること、これが私たちの魂に安らぎを与え、私たちの魂を生かします。

### 2A 「わたしに聞け」 48

そして次に主が、バビロンにいるイスラエル人に語られます。

#### 1B 頑なな心 1-11

#### 1C 心にある偶像 1-5

48:1 これを聞け。ヤコブの家よ。あなたはイスラエルの名で呼ばれ、ユダの源から出て、主の御名によって誓い、イスラエルの神を呼び求めるが、誠実をもってせず、また正義をもってしない。

48:2 確かに彼らは聖なる都の名を名のり、イスラエルの神・・その名は万軍の主・・に寄りかかっている。

「これを聞け」という言葉から始まります。12 節でも「わたしに聞け」という言葉です。14 節にもあります。なぜかという、よく聞いていないからです。午前礼拝でお話したように、よく聞いて心に受け入れる人は実を結びますが、そうでなければここに出ているような現象が起こります。口ではイスラエルの神の名を唱えますが、そこに真実味がないのです。

しかし、彼らは選ばれた民です。「ヤコブの家よ」という呼びかけは、人間味のあるヤコブのことです。エサウが生まれそうになっているのを、かかとを掴んで出てきた弟ヤコブです。そうしたヤコブが、御使いと格闘してイスラエルの名を主が与えてくださいました。主が愛され選ばれ、そして主にあつて勝利する新しい名であります。そして、「ユダの源」というのは、ユダから王が出てくる、またメシヤご自身であるシロから出てくるということです。ダビデが現われ、ユダの国が立てられ、バビロンに捕え移されたのはこのユダ族の民です。

これだけの愛と選びを受けているのですが、けれども彼らは応答していません。真実がない、また正義というのは、信仰によって神との正しい関係を持っていないで、ただ口だけで唱えているということです。「聖なる都」と言っていますが、もちろんエルサレムのことです。

48:3 「先に起こった事は、前からわたしが告げていた。それらはわたしの口から出、わたしはそれらを聞かせた。にわかには、わたしは行ない、それは成就した。48:4 あなたがかたくなであり、首筋は鉄の臑、額は青銅だと知っているので、48:5 わたしは、かねてからあなたに告げ、まだ起こらないうちに、聞かせたのだ。『私の偶像がこれをした。』とか、『私の彫像や鑄た像がこれを命じた。』とかあなたが言わないためだ。

なぜ、主への礼拝が口先だけのものになってしまったのか？それは、バビロンにある偶像を自分のものにしてしまっていたからです。「偶像」というのは単なる木や石で造られたものに限りません。世において、「自分がこうすればこうなる」という、自分の思い通りに適えてくれるその対象です。彼らこそが、主を知って、この方が語られることによって全てが動いていることを知るべきなのに、自分のやりたいように、自分の身近な生活でうまくやっていくためにバビロンの神々を持っていたのです。

しかし主は、クロスが来ることを約 150 年前にイザヤを通して語られ、しかも、その成就是、瞬間に行なわれます。バビロンが栄えに栄えていた時にその王が突如として殺され、バビロンが崩壊するのです。このことを通して、主なる神が確かに生きておられるのだということを否応がなしに知ることができるということです。私たちはどうでしょうか？まるで神がないかのように、数多くの偶像に囲まれている日本社会です。そしてもし私たちキリスト者が、この世の人たちと同じように、

「これこれが起きているのは、この便利な制度があるからだ。このような頼れるものがあるからだ。」というようなことを言っていたら、ここのユダヤ人と同じ過ちを犯しています。主はすべてのことにおいて、働いておられるのです。

### 2C 新しい事 6-11

48:6 あなたは聞いた。さあ、これらすべてを見よ。あなたがたは告げ知らせないのか。わたしは今から、新しい事、あなたの知らない秘め事をあなたに聞かせよう。48:7 それは今、創造された。ずっと前からではない。きょうまで、あなたはこれを聞いたこともない。『ああ、私は知っていた。』とあなたが言わないためだ。48:8 あなたは聞いたこともなく、知っていたこともない。ずっと前から、あなたの耳は開かれていなかった。わたしは、あなたがきつと裏切ること、母の胎内にいる時からそむく者と呼ばれていることを、知っていたからだ。

主が強調されているのは、新しい事です。そして新しい創造です。しかし、その新しい働きを既存のものへの繰り返しだとする彼らの頑なさを主は叱責しておられます。午前礼拝でも話しましたが、甦られたイエス様に対して心を閉ざしていた弟子たちが、そのようでありました。主が前もって語られていたのに、それでも十字架につけられたイエスの御姿は、自分たちの思っていたメシヤ、贖い主の姿ではなかったので、その中で思いが沈んでいました。このように、主の新しい御霊の働きを受け入れない心、それは生まれながらのものであり、背く心なのだと言われています。

この新しい御霊の働きを妨げるのは、肉の誇りです。「ああ、私は知っていた。」というような自分を誇りたい気持ちです。主の御霊は、私たちがキリストと共に十字架につけられたところから始まります。そして主が御霊によって新しく働いてくださるのです。

48:9 わたしは、わたしの名のために、怒りを遅らせ、わたしの栄誉のために、これを押えて、あなたを断ち滅ぼさなかった。48:10 見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試みた。48:11 わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行なう。どうしてわたしの名が汚されてよからうか。わたしはわたしの栄光を他の者には与えない。

主は、彼らを悩みの炉で試みられました。それはバビロン捕囚です。自分たちにいかに善がないか、神の御心を行なうのに無力であるかを知るために、彼らを試されました。それはちょうど、イスラエルがエジプトから出て荒野の旅において、主から出る言葉によって生きるように、マナを毎朝与えられたのに似ています。自分たちは、ただ主が命じられることによって生きるのだということを悟るために、主はバビロン捕囚の期間を許されたのです。

ですから、これは彼らを滅ぼすためではありません。主は彼らに良いことを考えておられました。そして大事なものは、彼らを生かされたのは主ご自身の御名のゆえです。主が一方的に、無力で、罪深い彼らを選ばれました。それは、神ご自身の恵みの栄光が現れるためです。これと同じように

私たちを、主は恵みによって選ばれました。自分ができるからではなく、できないからこそ、これからの働きが神によってのみ行なわれたことを知ることができるのです。

## 2B バビロンからの解放 12-22

### 1C 変わらぬ主 12-16

48:12 わたしに聞け。ヤコブよ。わたしが呼び出したイスラエルよ。わたしがそれだ。わたしは初めであり、また、終わりである。48:13 まことに、わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を引き延ばした。わたしがそれらに呼びかけると、それらはこぞって立ち上がる。

主に聞きなさいと、再び呼びかけておられます。「わたしがそれだ。」というのは、「わたしは変わることはない、わたしは同じだ」という意味です。初めに主が呼び出されたこのイスラエルに対して、今のわたしも変わらない、これからもイスラエルを救うのだと言われています。その力と主権を、天地創造の中で見ることができます。主の御心のままに、主が呼び出されるとその通りになりました。「光よ、あれ」と言われたら、光がありました。主は同じように、主権と力をもって私たちに臨んでくださいます。

48:14 あなたがた、みな集まって聞け。だれがこれらの事を告げたのか。主に愛される者が、主の喜ばれる事をバビロンにしむける。主の御腕はカルデア人に向かう。48:15 わたしが、このわたしが語り、そして彼を呼んだのだ。わたしは彼を来させ、彼の行なうことを成功させる。48:16 わたしに近づいて、これを聞け。わたしは初めから、隠れた所で語らなかつた。それが起こった時から、わたしはそこにいた。」今、神である主は私を、その御霊とともに遣わされた。

「みな集まって聞け」と主は言われます。イスラエル人たちが、集合体として聞きなさいということです。ここから非常に興味深い預言に入ります。「主に愛される者が、主の喜ばれる事をバビロンにしむける。」とあります。これはペルシヤ人クロスのことですが、彼がなぜ主に愛されている者なのでしょう？そして主の喜ばれることをする、という表現を神は言われているのでしょうか？今、主はクロスの前にある、ご自身の選ばれた者、メシヤの働きと重ね合わせているようであります。主に愛される者、主の喜ばれることをするのは、キリストご自身です。主イエスがバプテスマを受けられた時に、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。(ルカ 3:22)」クロスの働きの中に、後にユダヤ人を縄目から解き放つキリストの働きが予め示されていました。私たちを、罪の縄目に置いているこの世からの解放を与えられるのは、イエス・キリストです。

そして、「主の御腕はカルデア人に向かう」とありますが、御腕という言葉は出エジプトを意識しています。主が力強い腕をもって、パロによってイスラエル人をエジプトから連れ出されます。それと同じこと、いやそれ以上のことを主がクロス王を通して行なわれるということです。

そして 16 節の言葉も非常に興味深いです。まず、「隠れたところで語らなかつた」と主は言われ

ますが、それはクロス王のことを預言するイザヤを通して、初めからユダヤ人と共にわたしはいたのだ、と主ご自身が言われていることがあるでしょう。しかし、主イエスご自身がユダヤ人に捕えられ、裁判を受けておられる時にこう語られています。「ヨハネ 18:20 わたしは世に向かって公然と話しました。わたしはユダヤ人がみな集まって来る会堂や宮で、いつも教えたのです。隠れて話したことは何ともありません。」主はこのように、はっきりと語られる方でありました。ですから、私たちもはっきりと、主のことばを伝えるべきです。

そして、「それが起こった時から、わたしはそこにいた。」とされていますが、イエス様は、「アブラハムが存在するようになる前から、わたしはある。」とされました(ヨハネ 9:58 参照)。ですから、主ご自身がおられるということは、すぐそばにおられる、すでに自分自身がこの方に知られているという形でおられるということです。

そして最後、「今、神である主は私を、その御霊とともに遣わされた。」とありますが、ここの「私」は預言者イザヤであると同時に、キリストご自身が「私」と言われている部分であります。主が水のバプテスマを受けられ、聖霊が鳩のように降り、そして御霊に導かれました。そんな細かいところまで、イエス様によってイザヤの預言はことごとく成就していくのです。ここまで詳細に新約聖書と連動しているため、イザヤ書は多くの批評を受けます。イザヤはイザヤでなかったというものが、あります。40 章以降は第二イザヤ、また第三イザヤがあり、これこそが学術的であるとまことしやかに話します。けれども、それこそが「私たちは知っていた」とか、「私たちの偶像がこれをしたのだ」と言っていたユダヤ人の過ちを犯していることになります。しかし今や、死海文書が出ています。キリストが現れる前に、紀元前にイザヤ書が 1 章から 66 章までの全巻が一つなぎで見つかっています。

## 2C 平和の川 17-22

そして主が、一区切り目の終わりに、呼びかけを行われます。

48:17 あなたを贖う主、イスラエルの聖なる方はこう仰せられる。「わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。48:18 あなたがわたしの命令に耳を傾けさえすれば、あなたのしあわせは川のように、あなたの正義は海の波のようになるであろうに。48:19 あなたの子孫は砂のように、あなたの身から出る者は、真砂のようになるであろうに。その名はわたしの前から断たれることも、滅ぼされることもないであろうに。」

主がこれだけ良いものを備えておられるのだから、ただこの方に聞きさえすれば平安が川のように、正義が海の波のようになるのと約束されます。午前礼拝のメッセージをお聞きください。そしてキリストによって義とみなされる子孫が連なるという約束です。そして、断たれることがない、つまり永遠の救いも保障されています。そして次に結論です。

48:20 バビロンから出よ。カルデヤからのがれよ。喜びの歌声をあげて、これを告げ知らせよ。地の果てにまで響き渡らせよ。「主が、そのしもべヤコブを贖われた。」と言え。48:21 主がかわいた地を通らせたときも、彼らは渴かなかった。主は彼らのために岩から水を流れ出させ、岩を裂いて水をほとばしり出させた。

主が最後に呼びかけているのは、「バビロンから出よ。カルデヤからのがれよ。」であります。主がこれだけの良きことを行われました。罪を赦し、それを消し去り、虐げの縄目から解き放ってください。それなのに、未だ古いものにしがみついでいてどうするのでしょうか？そこには、救いの喜びがあるのです。そして、その喜びをここでは歌声をあげなさい、告げ知らせなさい、と呼びかけておられます。これが私たちのすることです。キリスト者の特徴は、救われたという喜びです。「主が、そのしもべヤコブを贖われた。」とあるように、贖われたという喜びです。そして、それを歌い、また人々に伝えることです。地の果てまでに伝える、つまり宣教することです。

そして、主はこのバビロンからの解放を、確かに第二の出エジプトとしておられるのが、21 節で分かります。荒野の旅において、主は確かに彼らに水を与えられ、彼らを潤わせてくださいました。同じように私たちがバビロンから出ていく決断をすれば、たとえ渴くようなこの地に住んでいても、水が流れ出ます。

48:22 「悪者どもには平安がない。」と主は仰せられる。

これが締めくくりです。否定的な締めくくりですが、ヨハネ第一の手紙も「子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。(1ヨハネ 5:21)」という唐突な警告で終わっています。平和の川が流れると主が約束されているにも関わらず、それを拒むのであればそこには平安はないということです。何をもって悪者なのか？それは、この主のすばらしさを自分の持っているものを捨てないで、それにしがみついで拒むことです。主の良き賜物を拒むことです。自分が悪者であっても、主の前にへりくだり、この方の恵みを受け入れる者には平安があります。そうでなければ平安がありません。